

鎌倉市図書館開館百周年記念式典

&

記念講演

作家

藤沢周氏

「本のある街角から ～本・出版・3.11～」

文化庁長官

近藤誠一氏

「文化による日本の再建 ～都市の役割～」

鎌倉市中央図書館

この記録集は開館百周年を記念して、平成23年7月20日（水）に鎌倉市生涯学習センターきらら鎌倉において開催した記念式典と記念講演会の記録です。

式典では、関連団体、議員の方々から祝辞をいただくとともに、今までお世話になった団体や個人の方への表彰を行いました。記念講演会では、鎌倉市在住の作家藤沢周氏、文化庁長官近藤誠一氏両氏にご講演いただきました。

目次

第一部 式典-----	3
ごあいさつ 熊代徳彦教育長-----	3
来賓祝辞-----	4
松尾崇市長-----	4
伊東正博 市議会議員-----	5
長尾真 国立国会図書館長-----	7
塩見昇 日本図書館協会理事-----	9
林秀明 神奈川県図書館会長-----	11
式典列席者紹介-----	13
感謝状贈呈-----	14
祝電披露-----	16
第二部 講演会-----	17
本のある街角から ～本・出版・3.11～ 作家 藤沢周氏-----	17
文化による日本の再建 ～都市の役割～ 文化庁長官 近藤誠一氏-----	30

ごあいさつ

■熊代徳彦教育長



みなさん、おはようございます。ご多忙の中、また今日このような悪天候の中、国会図書館長初め多くのご来賓の方々、市民の皆さまにご臨席をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、本日、鎌倉市図書館は設立100周年を迎えました。

明治44年、1911年7月20日に町立鎌倉小学校、現在の第一小学校ですが、敷地内に独立した建物として開館をいたしました。開館にあたりましては、東郷慎十郎（とうごう・しんじゅうろう）氏から金一千円と蔵書千余冊の寄贈を受けたことに端を発して、実現をいたしました。神奈川県内で現在、継続して運営されている図書館としましては一番古い図書館です。

100年の歴史の中には、二度の大きな試練もありました。一回は例の関東大震災でありました。もう一つは太平洋戦争です。

大震災の様子につきまして、当時の館の主事、鎌倉小学校長の相澤善三（あいざわ・ぜんぞう）氏は次のような言葉を記録に残しております。

「百雷の一時に落つるが如き音響と、濛々たる砂煙をあげて倒壊粉碎す」という言葉です。

また、戦争では昭和19年3月に閉館に追い込まれまして、軍の中隊本部として転用をされました。図書館が再開されたのは、昭和21年6月のことです。

1872年、明治5年には、当時文部省に勤務の市川清流（いちかわ・せいりゅう）という方が、立派な人間を作るには図書館に勝るものはないと考えまして、イギリスのロンドン図書館などを調べた上で、東京の湯島聖堂の講堂を借り受けてヨーロッパ式の図書館を開いたのが東京書籍館ということです。この書籍館が近代的な図書館として初めてであると言われています。

私は、図書館というのはいつの時代においても知恵を引き出し、人と人の成長を促し、その基盤をしっかりと支えてくれる宝物館のような存在であると思っています。

百周年を迎えた鎌倉市の図書館が次の50年に向けて、どのような歩みを重ねていけばいいのか、これまで支えていただきました多くの市民の皆さま、また図書館関係者の皆さまと共に、また知恵を出し合ひまして、より愛され、使いやすい、しかも県内公立図書館のお手本となる様な図書館を目指して努力を重ねて参りたいと思っています。

今後、図書館基金も市民の皆さまのご協力を得ながら作っていく予定です。どうか今後ともこれまでと変わらぬご指導、ご支援をたまわりますようお願いを申しあげまして、簡単ではございますが冒頭の挨拶とさせていただきます。

来賓祝辞

■松尾崇市長



皆さん、おはようございます。鎌倉市長の松尾です。本日は鎌倉市図書館がこの神奈川県内では初めて開館 100 周年を迎えられますこと、まことにおめでとうございます。私も鎌倉市長として市民を代表してこの記念すべき式典に出席できることを心から光栄に思っております。

ただいま、開館 100 周年と一口で申し上げましたけれども、明治 44 年の開館から大正、昭和、そして平成の現代まで、実に四つの時代にわたって開館してきたことを考えますと、本当に長い年月が経っているものだなあということを感じます。

この明治 44 年の図書館誕生には、一人の篤いお志、寄付・寄贈に端を発していると、先ほど、教育長からお話がありました。

また、関東大震災によって崩壊し、教室を使って活動していた図書館が、昭和 11 年に御成小学校内に新築されたのも、市民の篤志家による寄付・寄贈がその基になっています。

その他、鎌倉文士と呼ばれる著名な作家の方々やその他数多くの方々からご支援をいただき、今日のこの図書館であるというふうに認識をしております。

いつの時代も鎌倉市の図書館は、本当に市民の多くの方々によって育まれてきたと言えます。今後も市民の方々とともに歩み続ける、そして市民・利用者から信頼される図書館であり続けますよう心から願っているところでございます。

さて、鎌倉市は今、世界遺産登録を目指して取り組んでいるところでございます。そのためにも、この歴史的遺産や景観を残していくことはもちろんでございますけれども、鎌倉という町の記録をきちんと収集、整理、保存して利用に供するなど、世界中の方々に鎌倉の魅力を発信する役割を持つ図書館として今後さらに重要性が増してくると考えております。

この 100 周年を次の 100 年の新たなスタートとしてさらなる発展を目指して励んでいきたいと思っております。鎌倉市としましても、図書館を応援してまいります。皆様方もどうぞご支援のほどをよろしくお願い致します。本日は開館 100 周年本当におめでとうございます。

■伊東正博市議会議長



鎌倉市図書館開館 100 周年記念式典の開催にあたりまして、市議会を代表して、ひと言お祝いの言葉を申し上げます。

本日ここに、本市の図書館が開館して 100 年を記念する、大変意義深い日を迎えることができましたことは、誠におめでたく心からお喜びを申し上げます。また、このたびの百周年記念事業にご尽力された市民の皆様、そして図書館職員の皆様に改めて御礼を申し上げます。

さて、本市の図書館は明治 44 年 7 月 20 日に誕生いたしました。教育活動に大変ご熱心でありました、東郷慎十郎先生を始め当時の多くの町民の方々のご寄付によって建設されたそうで、公立図書館としては神奈川県下で最も古く、そして当時の住民の熱意と志によって築き上げられた歴史があると伺っております。

その後、関東大震災で建物が倒壊するなど、数多くの苦難もあったようでございますが、昭和 11 年に銀行家であり、歌人としても知られた、間島弟彦先生のご遺志を継がれた間島愛子夫人のご寄付によって、御成小学校の敷地の一部に再建されました。このように、鎌倉市の図書館が黎明期から発展期にかけて、鎌倉の教育文化の向上を願った多くの住民の方々のお力添えと高い志によって築き上げられてきたことは、文化都市鎌倉の市民の一人として大変誇りに思うところです。まさに市民の力による町づくりの一つのモデルを先人たちが今に生きる私たちに教えてくれていると言えるのではないのでしょうか。

現在、本市では、昭和 49 年に開設されました現中央図書館ほか、4 館の図書館を擁し、様々な図書館サービスを提供するなど、数々の新たな取り組みを続けて参りました。このことは、東郷先生、間島先生のような篤志家の方々だけではなく、多くの職員や市民の方々など、図書館を支え、その発展を願った人々の脈々と続く熱い思いがあつてこそであり、それが今日の図書館の発展につながっていると思います。

私が存じ上げる澤寿郎氏も、20 年に及ぶ雑誌編集の仕事の後、昭和 26 年鎌倉市役所に勤務され、社会教育課長を経て、鎌倉市中央図書館の館長を務められました。その中で、鎌倉の近世資料の研究に携わり、退職後も郷土史研究の発展に多大な貢献を果たされるとともに、鎌倉市の総合計画審議会の会長として活躍をされました。図書館の発展が文化都市鎌倉の発展をも支え、大きな原動力となってきたという一つの実例としてご紹介をさせていただきます

図書館は単に書籍や資料を収集し、読書を提供する場だけではなく、議会でも以前に、委員会の質疑の中で、こんなやり取りがありました。

市民が読みたいと思っている本のアンケートをとって購入してはどうか、という議員の質問に、当時、歯に衣を着せぬ発言で人気のあった生涯学習部長が、こんな答弁をしたのを、今でも覚えております。

「議員さん、お言葉を返すようですが、図書館は大きな貸本屋ではありません。図書館はま

さに、文化の集積地、発信地そのものであります。」

文化都市鎌倉を支える拠点の一つであるという自覚と責任を持って発展し続けてほしいと願っております。

このたびの100周年を、更なる図書館発展の礎として、これからも読書を親しむ場、情報提供発信の場、資料収集の場としてだけでなく、市民の交流の場として市民に愛される図書館であり続けていただきますよう市議会といたしましても強く願っております。

図書館を支えて下さっている市民の皆さま、また図書館職員の皆さまにおかれましては、100周年を迎えました今年を更なる発展の年と位置づけ、今後とも新たな試みも含め、本市の図書館事業の発展のためにご尽力下さいますようお願い申し上げます。

最後となりますが、本市の図書館事業がますます充実したものとなり、100周年事業が盛大に、かつ成功のうちに終わられますことを祈念いたしまして私のお祝いの挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

■長尾真国立国会図書館館長



鎌倉市図書館開館100周年、誠におめでとうございます。100年前、この図書館の創設に多大な貢献をされました東郷慎十郎氏をはじめとして、今日までこの図書館を維持発展させてこられた市民の市当局の方々、図書館職員の方々、またその他の関係者の方々のご努力に心から敬意を表します。

大正デモクラシーの幕開け直前の明治44年に建設されましたこの図書館は、日本全体を見ましても早期に設立された公共図書館であり、時代の進展に大きく貢献したものと存じます。そして関東大震災で建物が倒壊したり、第二次世界大戦と、その敗戦という試練の中で3年間にわたって閉館するという歴史をたどりました。しかし、戦後は順調な発展を遂げられ、中央図書館のほかに、4つの図書館を設置し、市民に対する図書館サービスも多様な形で展開しながら100周年を迎えられましたことは、本当におめでたいこととございます。

公共図書館には子どもから大人まで種々の目的を持って来館いたしますので、これらの人たちのそれぞれの目的を満たすサービスを提供することは容易ではありません。また、これからは図書館が単に情報や知識を売る場であるというだけでなく、生涯教育の拠点であり、人が憩いを求める場であり、人と人が出会う場であることが要求されるようになってきております。鎌倉市図書館におかれましては、利用者の多様な要求によく対応されてきているとともに、こういった図書館の新しい概念像についても、先取的に多くの試みをしておられますことは、賞賛に値するものであります。

3年前に出されました、文部科学省の改正図書館法では、ビジネス支援や、地域の特性に応じたサービスの強化、地域の各種企業の発展のための資料提供やガイダンス活動等についても書かれておりますが、社会教育施設としてまた地域の機能拠点として、地域社会のもつ課題や人々の情報要求に対して的確に対応し、問題解決型の要求に対しても適切なレファレンスサービス、つまり相談機能を提供することが必要となるなど、これからの公共図書館にとってその課題は山積しているわけでございます。

もう一つの課題は、これからの電子書籍時代に、公共図書館がどう対処していくかでありましょう。鎌倉市図書館では、すでにそのことについても配慮され、国のプロジェクト「平成22年度新ICT利活用サービス創出支援事業」に参加し、昨年（平成22年）の暮れから今年の3月にかけて、電子書籍活用の実験を行われました。その結果、得られた経験は貴重なものであると存じます。電子書籍の利用実験に使われたソフトウェアの機能が不十分であり、また、読める本が限られていたこと、あるいは利用者が十分に慣れていないところからくる問題など、いろいろと解決すべき問題があったようですが、これらは時間が解決してくれるでありましょう。それよりも、実験に参加した多くの方々がこれからは電子書籍の時代に移っていこうと考える、またこれを受け入れるという態度であるとともに、鎌倉にある豊富な歴史的資料を電子化し公開する

ことの意義をよく認識しておられるということは大変素晴らしいことと存じます。文書館や博物館などとの、いわゆるMLA連携も他に先駆けて鎌倉においてその具体化を図っていただければ素晴らしいことになると期待いたします。

国立国会図書館は、これまでの2年間に集中的な資料のデジタル化を行いました。その内容は、1968年（昭和43年）までのほとんどの図書、12,000種の雑誌の創刊号から2000年（平成12年）までのもの、古典籍58,000点、博士論文14万点、その他であります。

これらの資料の著作権処理も行いつつありまして、許されたものから順次ネット上に公開していく予定であります。その他の資料類は、残念ながら国立国会図書館内でしか、見ることができませんので、来ていただく必要があるというわけであります。しかし、せっかく大きなコストをかけてデジタル化した資料が、国立国会図書館の中でしか見られないということは残念なことである、ということで、文化庁も著作権分科会でいろいろと検討していただきました結果、手に入りにくい絶版本などについては、公共図書館までは配信してよいという結論を得ていただきました。この結論に基づいて著作権法の改正が行われると思いますが、そうなれば国立国会図書館のデジタル化された資料の多くは公共図書館から読んでいただくことができるようになるわけあります。

先般の著作権法の改正によりまして、障がい者の方々に対して、点字図書館だけでなく国立国会図書館、あるいは公共図書館等が要求に応じて書物のデジタル送信をし、大活字表示としたり、読み上げソフトによってテキストを聞く、というサービスをすることが義務づけられたわけあります。これに応じて私どもにおきましては、少なくとも平成25年度には本格的に対応する、ということを決めております。

鎌倉市図書館におかれましても、障がい者に対するデジタイズ図書のサービスなどを提供しておりますが、今後限られた予算の中でこういったことにどう対処していくかは大きな問題かと存じます。いずれにしましても、これからの公共図書館が電子書籍時代にどのようなサービスを提供できるようにするかは大きな課題であります。

このように今日の図書館は、多くの変革を要求されておりますが、鎌倉市図書館はこれまでの経験を踏まえ、種々の要求によく応えながら健全な発展をしていかれるものと存じます。

図書館職員や、市当局の皆さまのご努力はもちろんです、図書館を良くするのは利用者であり、住民であるわけでありますから、鎌倉市民の皆様方全てのご努力によって鎌倉市図書館がより一層発展していくことを期待いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。

100周年、誠におめでとうございます。

■塩見昇日本図書館協会理事長



おはようございます。日本図書館協会理事長の塩見です。鎌倉市図書館が 100 年をお迎えになったという式典にお招きを頂きまして、一言、図書館協会を代表いたしまして、お祝いのご挨拶をさせていただきます。

3 年前に神奈川県図書館協会が 80 周年をお迎えになったということで本日のようなこういう席がございました。出席をさせていただきましたけれども、事前に頂きました資料を拝見しますと、この鎌倉市図書館が神奈川県内の公共図書館では 100 年を迎えた最初の図書館であるということが書いてございました。誠にそういう意味では神奈川の図書館の歴史の中でこれは特筆をすべきことだろうと思います。その発端は、すでに皆さんお触れになっておりますように、明治 44 年に鎌倉小学校の敷地の中に設けられた町立図書館であったということのようですが、その時期というのが、地方改良運動ということで、通俗教育を広く国内に普及をしようという施策が大変盛んな時代。その一環として、通俗図書館を小学校の中に敷設をする形で造ることが全国的にも大変盛んだったわけでありまして。ただ、多くの県でその当時できた図書館がその後の図書館の母体として成長していたということが少なからずあるんですが、神奈川県図書館史という労作の記述によりますと、神奈川ではわずかにこの鎌倉市、町立図書館が唯一の例であったというふうなことが書いてありました。そういう点からもご当地の鎌倉市図書館は神奈川の図書館史の中で格別意義深い存在であるということではなかろうかというふうに思います。

また、これもみなさんお触れになりましたように、開館後の大正 12 年に関東大震災で全壊をしたということも拝見いたしました。その鎌倉図書館の 100 年がまさに関東大震災を上回る大規模な東日本の大震災の年に開かれるということも誠に因縁深いものを感じますし、さらに申せば、迫り来る台風のもとでこの 100 周年の式典が開かれるということも、何かとこの図書館の波瀾万丈、歴史を象徴するのかなというふうなことも思ったりいたします。

戦争末期の昭和 19 年 3 月には軍の司令部として接收をされて、『鎌倉市図書館百年史 (以後百年史)』の中に引用されておりました文章では、「戦局に関連性の乏しき事業」ということで 2 年余にわたって閉館を余儀なくされたという記述がございます。再開には 2 年余の歳月を要したということのようですが、その間の空白を埋めたのが、鎌倉在住の文士の方々が始められた鎌倉文庫。貸し本事業です。図書館不在の間をいくらか埋めた、というふうなことを拝見しますと、いかにも鎌倉らしいということを感じます。

社会の動乱、人々の生活基盤の損壊といったもつで、図書館という事業が、活動が遭遇する試練、苦難の典型を鎌倉市図書館は幾度も重ねて来られた、というふうに解説をし、貴重な日本近代図書館史の一断面を見る思いがいたしますとともに、その間のご苦勞を担って来られたみなさ

ん、関係各位のご労苦に対して、深く敬意を表したいと思います。

戦後の図書館再開に際して、市民の手で市民のものとして愛される図書館を目指すという構想をお持ちだったというふうなことも百年史の中で拝見をいたしました。

この鎌倉市図書館は半世紀余を経て今、図書館サービス計画に「市民とともに作るサービス」を掲げて市民の人たちの図書館に寄せる熱い思いを力にして、いよいよ難しい状況、直面する図書館の管理運営問題等々にも向きあい、今回の百周年事業についても市民との協働で『百年史』をお作りになる。こうしたことで戦後初期の基調というのを貫いてこられたということは、誠に賞賛に値することではないかと、拍手を送りたいと思います。

若干個人的な感想になるんですけども、私が初めてこの鎌倉図書館という名前を印象に残しましたのは1970年前後。もうずいぶん昔になりますが、当時私は大阪市の図書館で司書をしていて、大阪教育大学の教員に転ずるちょうどその頃だったんですけども、当時は図書館職員の専門職制度とか処遇について、大変関心を持っておりました。ちょうどそのころ、1970年くらいに、鎌倉市は司書を専門の技術職として一定位置づけ、一般行政職員の方よりも一号俸高く位置づけるという極めて珍しい、当時として希有な措置をお取りになったということに私は強い関心を持って、鎌倉図書館と言う名前をその当時強く頭に刻んだと思います。専門職制度自体は鎌倉でその後あまり発展していったという訳ではなかったようですが、図書館司書の問題というのは大変難しい問題でありまして、そうした問題に対しておつてそうした極めて珍しい一つの成果を残された、というのは今後この問題を考えていく上で一つの生かすべき教訓として考えていく必要がやはりあるかなと思います。

ここ鎌倉は文士、文化の方がたくさん居住されて、歴史と文化の香り高い街として全国的にもよく知られております。文学館の設置とか鎌倉アカデミアなど、大変ユニークな活動、施策をされてきました。地域づくりへの市民の関心もひとときわ高いものがあるかと思えます。近代史資料室の事業という形ですでに着手をされているようですが、鎌倉の教育、文化、学芸の歴史と蓄積を記録として保存するとともに、新たな街づくりの拠点、協働の場として百周年を迎えた鎌倉市図書館がますますの発展を遂げ、他の自治体に対しても、先進的な経験として供与して下さることを期待しましてお祝いの言葉とさせていただきます。100周年おめでとうございます。

■林秀明神奈川県図書館協会会長



みなさん、こんにちは。神奈川県図書館協会の会長を務めております、林でございます。鎌倉市図書館 100 周年、100 歳のお誕生日であります。おめでとうございます。100 周年、本当にすごいと思います。私ども、このすごさは二つあると思っています。一つは、言わなくとも分かっていることでもありますけれども、「市民とともに歩み続けた 100 年」であるということでもあります。東郷先生、間島先生の思い、それが現在もここにいらっしゃる大勢の方々の活動に引き継がれていると思います。『鎌倉図書館百年史』と言う大部な本は、和田さんたち図書館人と市民の方々の協働作品であります。

市民の中の図書館、これは素晴らしいことだと思っています。

もう一つ、実は素晴らしいことがあるんです。これは、「神奈川県内の図書館との連携・協力の下に歩み続けた百年」であったということでもあります。私ども神奈川県図書館協会が設立されるのは、1928 年(昭和 3 年)であります。その年、すでに鎌倉図書館は 17 年、17 歳であります。図書館協会の設立、役員 21 人いるんです。この中に、鎌倉図書館の山口萬さんという方が入っていらっしゃいます。当時、鎌倉図書館館長は当時の町長さんなんですね。司書は鎌倉の小学校の校長先生であります。山口萬校長先生が司書として事実上の館長をやっていた。80 年前山口さんらによって、この神奈川県図書館協会が設立された、ということでもあります。神奈川県図書館協会の会報「神奈川県図書館月報」というのがありますが、ここにもたびたび、鎌倉の図書館が登場します。

月報 35 号、昭和 12 年、1937 年の 1 月 1 日号の巻頭が写真とともに「新装なれる鎌倉町立図書館」という紹介記事が大きく出ています。新しい図書館は亡くなられた間島弟彦先生の遺志を継いだ、愛子夫人の寄付によるものであるということが書かれております。鎌倉の御用邸の跡地に建設されたということ、それからもう一つ、専任の司書を今度置くことになりましたということもここに紹介されています。

その後、戦時色が強まってまいります。

昭和 17 年 4 月には図書館協会の会報、「図書館月報」が廃刊になります。それから 5 月には図書館協会もですね、神奈川県社会教育協会に合併、併合されてしまいます。昭和 19 年、鎌倉図書館も閉館になります。昭和 20 年、終戦を迎えます。

その翌年、1946 年、昭和 21 年 6 月に鎌倉図書館が再開します。そして 7 月にこの鎌倉図書館において、神奈川県図書館振興協議懇談会という会議が開かれます。県内 11 の図書館長が戦後初めて一堂に会してですね、新しい時代の図書館の復興について語り合った記念すべき会議であります。これも鎌倉図書館で開催されました。そしてその翌年、1947 年 3 月に神奈川県図書館協会が再建されます。この再建草案を起草したのが鎌倉図書館、横浜の図書館、そして県立金沢文庫、この 3 館で起草しています。

鎌倉図書館、戦前、戦後、そして大事な局面で、図書館の連携・協力をきちんとひっぱりつづけてきた大事な図書館です。今もそうです。

市民、企業の図書館へのニーズは多様化・高度化しています。とても一館では対応できない。おのおの特色ある蔵書を作っていく。相互に図書館同士で図書を貸し借りする。広範な市民のニーズに応えていくということが大事になってきています。そのために図書の相互検索のシステムを作る、あるいは相互貸出配送のシステムを作る、ということが大事です。

鎌倉図書館は神奈川県図書館情報ネットワークに平成3年に加入しています。今から20年前であります。県立の図書館同士のネットワークの本格稼働が始まってすぐ、かなり早い時期に県立と市町村のネットワークをリードしてくれたのも鎌倉図書館であります。相互貸借の利用も活発であります。同じ人口規模の自治体の1.5倍も図書館同士の相互貸借をやっているんです。蔵書構築を別に怠っているのではないんですね。他の市の図書館というのは、9割は市町村同士の図書館の貸借なんです。ところが鎌倉の場合は、市町村同士は8割、そして県立とか大学のような専門的な図書館との貸借が多いんですね。

きちんと他の図書館との連携を意識して、市民の方々の図書館活動を意識して、特色のある蔵書構築をしているんだと思っています。

私は県立図書館館長もやっています。神奈川県立図書館は、あと3年ほどで還暦を迎えます。100歳にはなりません、還暦を迎えます。横浜の紅葉坂の建物は60年前に、のちに国立国会図書館を設計する前川國男先生が鬼頭梓先生らとともに「民衆の為の図書館」として設計したもののなんです。

そこには図書館が相互に有機的に連携し、協力して、地域の県域の隅々まで様々な要求に応じてサービスを提供していく姿が構想されています。

1955年（昭和30年）に「新建築」という雑誌に鬼頭氏が書いている文章なんですが、「市の大きな図書館は自分の支部図書館を持つであろうし、また近接する市町村の図書館はそのサービスの全体または部分について契約を結んで、協力の組織を持つであろう。また、辺鄙な部分は県立の図書館が直接支部図書館をもち、ブックモバイルによって、常に新しい書物を提供するであろう。県・市・町・村の図書館はまた、相互にサービスを提供しあい協力しあうであろう。これらのことは、現在はほとんど円滑に行われていない。その現状がたとえどれほど絶望的であったにせよ、やがて活発に動き始めるに違いない。鉄筋コンクリートの耐用年数がもし200年であるならば、図書館建築は、図書館の現状よりむしろ将来への正しい見通しによって建てられなければならない。」という文章です。200年。鎌倉図書館がこれからの100年も市民、あるいは図書館人たちの思いとともに歩んでいただけることをお願いして、また信じまして、私のお祝いの言葉としたいと思います。

本日は本当におめでとうございました。

式典列席者紹介

衆議院議員 浅尾慶一郎様のご公務のためご欠席のため、代理の上嶋薫様

神奈川県議会議員 中村省司様

神奈川県議会議員 早稲田夕季様

鎌倉市教育委員会教育委員長 林雅巳様

鎌倉市教育委員会教育委員長職務代理者 山田理絵様

鎌倉市教育委員会教育委員 朝比奈恵温様

鎌倉市教育委員会教育委員 下平久美子様

感謝状贈呈（林雅巳鎌倉市教育委員会委員長より）

■東郷慎十郎氏

本日、私たちが神奈川県内の図書館として初めて、開館 100 周年の記念式典を開催できますのも、東郷様の多大なるご寄付と沢山の蔵書のご寄贈が、図書館誕生の発端となったからであります。鎌倉市図書館の生みの親と言っても過言ではございません。本日は東郷慎十郎様のお孫さまに当たられます、東郷輝久様、並びに奥さまのけい子さまに感謝状を贈呈させていただきます。

■間島弟彦氏

間島様ご夫妻は、開館後、12年後の大正 12 年に発生した関東大震災によって倒壊した鎌倉図書館を、昭和 11 年御成小学校内に新築する際、多大なるご寄付と貴重な蔵書のご寄贈をしてくださいました。それにより震災後、教室で細々と開館していた図書館が新たなスタートを切ることができたのです。

本日はご子孫の方が生憎ご都合により出席できないため、ご紹介のみとし、後日感謝状をお渡しすることとさせていただきます。

■鎌倉アカデミアを伝える会

「鎌倉アカデミアを伝える会」は、鎌倉アカデミアに関する資料の保存や、シンポジウムの開催などアカデミアについて広く伝える活動をしている団体です。皆様から沢山の貴重な資料を寄贈・整理していただいております。

■鎌倉視聴覚協会

「鎌倉視聴覚協会」は、視聴覚機材を利用し地域社会に貢献すること、会員相互の親睦と技術の向上を図ることを目的としている団体です。「鎌倉市図書館百周年記念映画会」も一昨年から実施してくださっています。

■鎌倉市点訳・赤十字奉仕団

「鎌倉市点訳・赤十字奉仕団」は、点字本の作成等のボランティアをされている団体です。図書館でも録音図書目録の点訳本の作成をしていただいたり、CDに付けるタイトルの点字作成をしていただいております。

■鎌倉朗読・録音奉仕会

「鎌倉朗読・録音奉仕会」は、視覚障害者への貸出用録音テープ図書の製作や対面朗読等のボランティアをされている団体です。図書館でも録音図書を長く作成していただいております。

■郷土史料を読む会

「郷土史料を読む会」は、主に近世文書の解説、整理を行うことで、鎌倉の文化発展に貢献されている団体です。

■CPCの会 湘南・鎌倉生涯現役の会部会

「CPCの会」は、写真 (photograph) を通して、地域社会 (community) に貢献 (contribution) しようとして活動している会です。近代史資料室の古写真の収集・整理、写真展の開催などにご協力をいただいております。また平成16年度から「鎌倉の谷戸の現状撮影と調査」活動を始めました。

■玉縄の古文書を読む会

「玉縄の古文書を読む会」は、玉縄を中心とした地域の古文書資料を読みながら、郷土史の勉強をしています。平成16年度に『東海道藤沢宿助郷会所日記』を発行しました。

■図書館とともだち・鎌倉

「図書館とともだち・鎌倉」は、平成10年、有志の方々により発足し、鎌倉市図書館の応援団として活動しています。大人を対象とした講演会や「著者を囲む会」、「図書館員と話そう！」などを開催しております。

■蟲の会

「蟲の会」は、近世・近代資料の解説、整理を通じ鎌倉の文化発展に貢献している団体です。

■安田三郎写真を保存する会

「安田三郎写真を保存する会」は、写真家・安田三郎氏の撮影した沢山の鎌倉の写真を整理することを通して鎌倉の文化発展に貢献されている団体です。

■りんどう

「りんどう」は、16ミリ映写機の操作方法や、ビデオ撮影と編集技術向上のための研修を行っています。また、16ミリ映写会開催に関する相談と映写ボランティア派遣を行っている団体です。鎌倉視聴覚協会同様、「鎌倉市図書館開館百周年記念映画会」も一昨年からは実施していただいております。

祝電披露

参議院議員 大石尚子氏

お祝い：由緒ある古都鎌倉に 100 年。歴史をもち、多くの文人との縁をもって、現代の鎌倉の文化の中心となってきた鎌倉市図書館。私も幼いころから使わせていただき、思い出の深い、学びの館と感謝しております。ますます特徴を生かされ、いつまでも市民の輝く広場として発展されるよう心から願っております。参議院議員 大石尚子

記念講演会

「本のある街角から～本・出版・3.11～」

作家 藤沢周氏



藤沢周氏プロフィール：

1959年、新潟県生まれ。法政大学卒業後、書評紙『図書新聞』の編集者を経て、1998年『ブエノスアイレス午前零時』で、第119回芥川賞を受賞。

現在、NHK-BS「週刊ブックレビュー」の司会、神奈川新聞のコラム「木もれ日」でも活躍。

今日はお天気の悪い中、お集りいただきまして、ありがとうございます。藤沢周です。

鎌倉市図書館開館 100 周年。これはもうすごいことですよね。県庁所在地の横浜ではなく、鎌倉市の図書館が神奈川県で初めて 100 年を迎えるということ。つまり神奈川県で一番古い図書館ということになりますね。百年を迎える歴史ですが、それなりに鎌倉という土地の素地、文化的素地というものが無ければこの歴史は成立しないだろうと思います。

最初は町立図書館だったんですね。東郷慎十郎さんはじめ多くの篤志家の方々が寄付されて、成り立ったということですが、ちょうど 100 年前の今日 7 月 20 日から 100 年目ということになります。

僕は、鎌倉に住んで 17、8 年くらいになりますけれども、図書館の歴史もそうですが、何よりも鎌倉という土地に染み付いた文化レベルについて考えていたんです。

よく、年表のような歴史の資料を見ますと、横須賀線の開通は 1889 年となっています。鎌倉は横須賀線が開通して、いわゆる貴族や華族とか政財界の名士が集まったといわれる土地です。別荘ができた。それにもなっていくゆる鎌倉文士が集まってくる。さらには哲学関係者。皆さんも名前を聞いたことがあると思いますけれども、「鎌倉アカデミア」というのが昭和 21 年にできています。

三枝博人、哲学者で、ヘーゲルの研究者で有名な方です。あるいは林達夫さん。この方は自

由主義思想家ですね。百科事典の編纂にも携わり、「共産主義的人間」という本を出されている大変な学者の方です。そういった方々を教授として招聘して、文科省の統制の外になる自由な民主主義的教育をめざした学術団体が、鎌倉アカデミアです。

これだけでもう特殊な土地ならではの話だなと僕は思います。そういう文化的な素地があって図書館の歴史も生まれ、あるいは図書館が文化の発信拠点として機能していったことなのかなと思っています。

僕が鎌倉に住んでから、しばらくして母校の法政大学で文学を教えることになりました。学生たちに「先生、どこに住んでるんですか？」ときかれて「鎌倉だよ」と答える。たいていの学生達が「鎌倉いいとこですね〜」と言うんですね。そして「やっぱり鎌倉って怖いんですか？」とも言うんです。僕なりの解釈で、「そりゃ怖いとこだよ」と答えるわけです。ところが、「やっぱり先生も見えるんですか？」と言うから、何のことかと思ったら、つまり幽霊のことです。パワースポット。たしかに、北条高時の腹切りやぐらに行くとも僕も金縛りにあったような状態になるし。釈迦堂切り通しなんかを一人で歩いていますと、あそこは通行禁止ですが、何かしら昔日の武士の声を聞いたような気分になったりですね。あと、僕が鎌倉に引っ越してきたばかりの時に毎日が観光気分でいろんなところをまわっていた頃、一人で源氏山の方に登って行って、ある坂を下りて行った。誰もいなかったのですが、奇岩ともいえるすごい岩がごつごつして曲がりくねった坂を歩いて下りて行ったら、ふっと僕の中に言葉が降りてきたんです。「昔、俺はここで女を殺したことがある……」っていう言葉なのです。あれは何かが憑依したのかも知れませんが、「うわっ、おっかねえ」と思っていますね。やっぱり鎌倉って霊的な地なのかと。慌てて下りた覚えがあるんですが、実はそこが観光名所として有名な化粧坂だったんです。それに気づいて僕の俗物加減に自身呆れてしまいました。あの化粧坂というところも、名前の由来はいろいろあります。その当時、遊女が住んでいて化粧をしていたから化粧坂。あるいは武将たちが敵の武士の首を取って首実験をした。化粧をしてから首実験をした場所だからだとか、あるいは険しい坂だからそれが転じて、化粧坂になったといったことも聞いたことがあります。

そういうふうにはいろんなパワースポットが確かにあります。実際、僕も霊は何度か見たことがある。確かにそれは怖いんです。でも僕が学生達に「怖いところですか？」と聞かれた時に思ったのは、「いや、違う。霊も怖いよ。怖いけど、もっと怖いのは生きている人間なんだ」ってことを言ったんですね。

17、8年前に、夢の鎌倉に住むことができて、「わー♪」などとはしゃいで、小町とか、北鎌倉の駅前の「侘助」とか、今でも入り浸りですけどもね、呑み屋さんとかいろんなところをまわりました。例えば鎌倉の小町の呑み屋さん。その当時僕は近代文学を否定してデビューしたつもりになっていたんです。ですからその時に若い編集者の仲間と話していて、「いやー近代文学なんてさ」みたいな、今考えれば脂汗が出るような不遜なことを言っていた。ふっとカウンター横を見たときに、鎌倉在住のものすごい偉い作家の先生が無然と座っていらっしゃる。その奥には作家たちが恐れる名編集者の方も座っていらっしゃったんですね。僕は酔眼朦朧で「近代文学なんてぶっこわしてやんなきゃダメだよ」みたいなことをしゃべっていたんだけど、その姿

を見てもう一気にシュン、おとなしくなっちゃった。怖くなっちゃった。さらにその向こうにも一般の、要するに地元の酔客の方々がいらっしやるわけです。もう作家だろうが美術家だろうが、芸術家だろうが、そんなの無視ですね。当たり前飲んでる。「お前らの言うことは大したことはねえ」って顔でいる。

もっと怖いのがカウンターの中にいらっしやる、例えば女将さんですよ。もう本当、うるさがたの作家たち芸術家たち、学者たちを相手に「この前書いたの、あんた、ちょっとゆるいね」と平然と言われる。僕はもう何度も言われました。時々褒めてもらいます。「この前、いい作品だったよ」と褒めてもらったら有頂天。「もう一杯！」となりますが。今回もですね、「いやー、僕、鎌倉生涯学習センターで講演なんですよ」と泣き面でいったら、「タイトルは？」と聞かれた。「『本のある街角 ～本・出版・3. 11～』なんだけど」「あんたそんな喋れるの？」とくる。「いや、実は女将さん、俺があんまりのんびりしていて、図書館の方がね、気をまわして仮のタイトル付けてくれちゃったんですよ。それがそのままになっちゃった。俺、喋れるかな～」と。「はあ～ダメかもね」と女将さんに言われました。

そういう土地柄ですからね。鎌倉人自体がすごい怖いなど。それぞれ一般の方々も長い歴史と文化に揉まれて、ハイレベルな土壌に育ってますから、自分なりの思想・哲学・表現を持っている。そういう意味で、僕は学生たちに「鎌倉ってやっぱりいるとすごい自分も鍛えられるし、試される土地なんだよ」と話をしました。

「でもじゃあなんでそんな土地になっちゃったんですかね？」って学生は言う。先ほど言った、横須賀線の開通とともに様々な方が集まってきたというのかもしれないけれども、もっと時代を遡って、禅宗ですね、これがキーになるのではないかと思うのです。鎌倉禅。曹洞宗、臨済宗、黄檗宗などありますけれども、特に鎌倉は臨済宗なんですね。例えば鎌倉五山第一の建長寺。開山・蘭溪道隆、あるいは円覚寺は無学祖元が開山。みんな中国の宋からやってきた禅僧です。その新しい最先端の文化を学ぼうと思って、あらゆるところから禅僧たちが集まる。中国からも集まったでしょう。日本からも各地から集まってきた。そしてたぶん、僕ら今歩いている道ですね、鎌倉街道など様々な道。おそらく、中国語が飛び交っていたんじゃないかと思うんですね。そうやって切磋琢磨していた。このまさに禅の発祥地である鎌倉ということがキーなんじゃないかと思います。

特にこの「禅」というのは、余談になりますけれども、僕も大学に入る前に禅寺で修行していたことがあります。禅は僕のライフワークになると思うんですけども、作家にならないで禅僧になろうかと本気で思ったこと時期もあったんですけどね。その禅の考え方がとても好きで、未熟ながらずっと読んだり、研究したりしているんですけど。簡単にいうと、我々は言葉で世界を認識しますが、まずこの「言葉」というものを疑っていく。そして常識、価値観を疑っていく。さらに言葉を持っている自分自身も疑っていく。疑って、良い意味で壊していく。そして世界の実相、真相ですね。本当の姿を探っていこう、これが禅宗のあり方なんですね。これが自然に身に付く場所と言うんですか、ある種の文化的遺伝子、鎌倉 DNA と言っていいいんでしょうか。鎌倉 DNA が連綿と繋がれていって、禅宗的思考方が一般の方々にも染み渡っているんじ

やないかな、と思うのです。

この文化的遺伝子というものを、例えば、今現在の我々のこととして考えてみます。もうこの時代ですからとてつもない量の情報が氾濫して、様々なニュース、娯楽、音楽……いろんなものが入ってくる。ところが都心、都内の人とまた違います、この鎌倉に住んでいる方々は。必ず、ああいうニュースがあったね、情報があったね。でもホントかな？ たいしたことないんじゃないの？ 必ずこういうスタンスなんですね。まず、いったん自分が咀嚼して疑ってみる。いい意味で疑ってみるということ。ひょっとしたら、むしろ「我関せず」みたいな、泰然自若的なところがあるのかもしれないけれども、やはり禅が育んできた発想・思考法みたいなもの。鎌倉スタイルみたいなもののせいではないかなと思います。

僕の先輩作家である今も鎌倉に住んでおられる三木卓先生は「鎌倉時間」という言葉を言っているんですね。僕ら横須賀線から乗ってきて、大船を過ぎたと同時に時間が変わる。それを「鎌倉時間」と言います。確かに自分自身も乗っていて、大船過ぎた時にちょっとこう、ある種の時差のようなものを感じますね。それは土地の落ち着きであるとか、人々の佇まいであるとか、様々なことが影響しているのだと思います。あるいは古刹。古いお寺がたくさんある。自然がある。

そういうこともあります。そうしたときに、ある種の情報にまみれた自分の身体、自分自身がずっと澄んでいく。単純に雰囲気の問題ではない。あ、自分は鎌倉に戻ってきた。ずっと禅で鍛え上げられてきた土地に戻ってきて自分自身がいろんなノイズにまみれていたけれど、ああまた、ちょっとリセットできる、とそんな感じを毎回毎回僕は船を過ぎたあたりで思いますね。

この自らが思考する、表現する、あるいは良い意味で疑っていく、偽物に惑わされない。そういう鎌倉遺伝子を我々はどこかで持っているわけです。

例えば今回の3月11日の東日本大震災を、どのように捉えるか。戦後、こんな一つの出来事でいろんな言説が集中したことは、たぶん初めてだと思います。いろんな情報が出てくる。今も未だに出てきています。様々なことが言われています。だが我々、鎌倉DNAを持った人間はどういうふうに捉えていくのだろうかということをちょっと考えてみました。

実際3月11日、皆さんはどこで過ごされていたか。僕はちょうどその頃、八王子にいました、12時間かけてようやく朝、鎌倉にたどり着きました。家に帰ってテレビで見たあの津波の映像、あんな凄絶な風景は見たことがありません。皆さんもそうかもしれません。もちろん戦時中はまたさらに大変だったのかもしれませんが、ある種言語を絶する状況だったですね。さらにはその天災に加わって原発事故と言う人災が加わってしまった。3月11日以後、日本の近代システムのずさんさ、あるいは、グロテスクさがあらわになったと思います。

その地震が起きて、鎌倉に着いた翌日、親しくしている若い編集者から電話が入ってきたんです。

「逃げましょう」とまず第一声。「何、言ってんだ」と思ったが、「とにかく、先生逃げましょう、関西に行った方がいいです。」「ちょっと待てよ、どうしたんだ」と聞けば、「完全に原発がメルトダウンおこしている。—その時はメルトダウンという言葉はなかったんですが—もう溶解してますよ。僕にね、情報が入った」って言うのです。「その情報どこから？」と聞くと「い

や、インターネットとかそういうもんじゃないです、あるルートがあつて、そこから手に入れた情報です。逃げましょう」と。あまりの恐慌をきたしているから、あえて「いや〜、俺、メ切間際だし、いいわ」などとのんびりしたことを答えた。

向こうでは泣きそうになっていました。結局、彼は京都へ逃げたのですけれども、それと同時にその電話の時にこう言ったんです。「先生、文学って無力ですよ。文学とか思想ってなんなんですか、こんな時。全然無意味じゃないですか」と。「ああ、そういう意見が出てもおかしくないな」と思ったんですね。おそらく 3.11 以降は物資の問題、避難の問題。様々な、もっと大きな意味で言えば兵站学、ロジスティックスのようなものが重要視されただろうと思います。文学や思想よりも、食うこと、寒さを凌ぐことが第一。それは当然わかります。

だけれども、「文学は無力」と言われた時に、「そうかな？」って自分は思ったんですね。はたしてそうだろうか。

僕らは、あるいは作家、詩人、文学、あるいは芸術をやっている者、思考する者。特に文学というものは、むしろ「震災以前から震災以後」を書いてきた。そんな思いでずっと書いてきたのです。

どういうことかといいますと、いわゆる形骸化した言葉、あるいは価値観、流布している政治的な言説など様々なものがありますが、今回の震災はリバイアサンと言ってもいいでしょうか、天災と人災という巨獣がそれらを破壊してしまった。文学というものはそういうものが破壊される前から、既存の言葉の網では捉えられないことを抽出してきた。震災以前から今の状態を、人間にとって何が必要かを考えてきたつもりだし、それをモチーフとして書いてきたと思っているわけです。

ですから「近代」という病、「近代」というシステム、あるいは「近代」という言葉の網に絡め取られない真相を掴もうとして何とか頑張ってきた。むしろ、逆に危機的な言説に翻弄されるということは、またさらに近代の罠にはまるのじゃないか。その編集者のように「文学は無力だ」と言うのはわかるんだけど、そこでパニックになるということは、また近代のシステムに絡みとられるという気がしたんです。

確かに、僕ら言語を絶するような状況に直面すると何もできなくなって、考えられなくなり、書けなくなるのは、人間として、本能として当たり前だと思います。思想とか文学とか無意味じゃないか、生々しい現実のみが全てなんだと思うのは当たり前だと思います。精神科医の斎藤環さんという方が面白い言葉を言っています。「リアル病」。リアルな病。生々しい現実しか、もう見られなくなるということ。

確かに 3.11 以外にも、例えば 1923 年におきた大変な地震、関東大震災のときに、我々の大先輩で知的な作風で知られていて、文藝春秋を創刊して芥川賞・直木賞を設立した菊地寛さんが、関東大震災の直後にこんなことを言ったんです。「もうこれで文学はおしまい」と断言してしまいました。これもリアル病の一つだと思います。

言語に回収されないリアリティに圧倒されて言葉を失う。単純に考えて我々もそうです。やっぱり震災以後の 1 週間、2 週間、失語症のようになって、文章を書く気になれなかったですね。

「やばいな」、と思った。だけど、だんだん近代のシステムのずさんさがあらわになり、グロテスクさがあらわになってくる。「待てよ、ここでいったん、もうちょっと時間をかけて考えよう。そうして戻ってくれば、新たなリアリズム、新たな物語が生まれるはずだ」。そういう思いで、またもう一回小説を書き始めました。

この事態を迎えたとあっては、従来の高度経済成長期の政治、あるいは言説、文法では、もう日本のシステム自体が引き起こした過剰さ、あるいは破綻みたいなものを処理できないだろう。これはいろんな方が言っていますし、僕もそうだろうな、とっていました。過剰さを自分で処理できないから、当然どうするかと言えば、ごまかしの言語・言葉がでてくる。

東電の方はあの原発事故を「事故」という言葉を一回も使っていないんですね。「事象」と言い換えている。テレビを見ていると「この事象は」と言っている。このごまかしの形、構図というのは戦時中と同じだな。

戦時中に戦死、戦って死ぬことを「散華」。あるいは敗退を「転進」と言いますね。全滅を「玉砕」などという言葉に置き換えた。言葉を置き換える、ごまかしてくる。今現在でもそういう構図がある。そうすると、何が本当なのか。何が真実で、何が嘘で、何が現実で虚構なのか。この境界が非常にあいまいになってくる。不安定になってきますね。政治も行政も自家中毒に陥っているわけです。今まさにその状態だと思います。それでも昔は中央集権的なシステムがあった。統合システムが有効だったんですね。つまり言葉というものの、印刷と、言説・流通、集権的テクノロジーに基づいて拡散する集中型だった。これを悪用すれば、例えば国民を煽って戦争に突入するなんてこともあり得るわけですね。国民もそれを真実として受け取ってきた。その情報ルートがそこしかないわけですから。例えば我々が使っている国語も本来、近代国語政策を考えた時に、僕らは当たり前日本語を使っていますけれど、「国語教育」も元々、要するに国のメッセージ、方針、理念を伝えるために、理解させるために国語教育を始めた。ところが、我々一般人そんなにバカじゃないですからね。その国語に基づきながら、考える、表現する、反省する、検証する。そういうことをやります。そして文学が生まれてくる。芸術が生まれてくる。哲学が生まれてくる。たくさんのいいものが残っています。

じゃあ今現在はどうか。

もちろん文学も、芸術も、哲学もたくさんのものが出てきますけれども、さらに昔と圧倒的に違うものは何か。そして集権型テクノロジーの網とは全く違う部分から出てくるメディアは何か。と言うと皆さんがご存知の、よく使われているインターネットですね。

こうやって見渡してみますと、僕のおふくろよりも年配の方はいらっしやらないみたいですね。僕のおふくろは今、八十三。新潟で一人暮らしていますけれど、僕が新潟に帰る時はパソコンを持って行きます。ガチャッと電波型のモバイル用のアンテナを入れるんですね。で、インターネットに接続する。おふくろは「あんたこれ何なの？」って言いますね。「これ繋ぐと、何でもわかるのさ。欲しい情報が手に入る」「その情報とやらは、この機械の中に入ってるの？」っていうわけです。たぶん年配の方、お年寄りの方はそういう発想になるかもしれない。「いや、そうではなくて、電波の向こう — 電話線の向こうでもいいんですけど、いろんな情報のプー

ルがある。そこに接続して自分に必要な情報を得るんだよ」と話をする。「ああ、私ようわかんないわ」「じゃあ、何かおふくろ調べたいものある？」って聞くと「幼い頃通っていた小学校なんか出てるかな、もうないはずだけど」「何という所？」と聞いて検索すると古い写真が出てきたりして。ものすごく感動していたんですけれど。そのように、80歳以上の方でも駆使される方もいるかもしれませんが、なかなか面倒くさくてやらない方も多いかもかもしれませんが、このインターネット。先ほどの僕が教えている学生たちは当たり前に使っているし、僕自身もインターネットを使って、原稿をメールという形で出版社に送っちゃう。原稿をその場で渡すのではなくて、出版社にメールで送る、電子データ化して送るわけですけどね。非常に便利な部分もあるんです。

このインターネットは、ひょっとしたら近代国家は破綻するかもしれないな、というくらい力を持っている情報網です。高度経済成長期のシステムを変えてくれる可能性もある。すごい可能性を秘めている世界ではあるのです。皆さんも聞いたことがあると思いますけれども、「ツイッター」というものがありますね。携帯電話からでもパソコンからでもいいんですけども、140字自分の意見を述べる。そのツイッターに登録していれば誰も見られるわけです。自分の意見を言う。それに対してすぐ反応が返ってくる、返事がくる。不特定多数の人から情報を手に入れることができる。

あるいはグーグルという検索の大手もあります。検索欄にこういうことについて知りたいと入れると、パーンと答えてくれる。便利といえば便利ですよ。あるいはジャスミン革命の発端になったフェイスブックも、インターネットを駆使して成り立ったものです。とても便利なツールなんですよ。言葉の電子データ化。即効性があるし、しかも簡単です。この中でツイッターをやっている方、何人かいらっしやと思いますけれど、例えば、「藤沢がステージで裸で踊りだしたなう」なんと打ったとします。それを登録した人たちが見たら、「え、マジ?」「あ、そうなの?」とパーッと本当の情報も広まるけれども、嘘の情報もパーッと広がる怖さがあるんですね。これ、何なんだろう。もちろんマイクロポリティクスー小さな自分たちの世界や政治を築きたいという意味では有効ではある。大小さまざまな情報を扱うこともできる。

今、話題になっている書籍の電子データ化も便利じゃないですか、合理的じゃないですか。効率的だし、スペースもいらないし。確かにそうですよね。僕自身も、書籍の電子データ化は便利なものもあるな。特に新聞、雑誌系の即効性のある情報モノは必ず電子化されるだろうと思う。それでもいいと思います。じゃあ我々がやっている小説はどうか。ひょっとしたら作家の方の中には全部電子データ化された方がいいという人もいるでしょう。簡単です。小さい中に全部入っちゃうわけですから。重くて場所を取る本棚がいらない。

ところがですね、ここでちょっと立ち止まってみないといけません。この高度経済成長期のシステムを変えてくれる可能性を秘めているけれど、単純にインターネットを信じていいのかな? ちょっと立ち止まろうと思うんですね。つまり、心性の問題として。

例えば「鎌倉市図書館」をグーグルで検索する。インターネットにつないでグーグルのページを出します。グーグルはどんなものでも調べられる。空欄があつて調べたいもの「鎌倉市図書

館」と入れたら 48 万 3000 件出てきた。つまり鎌倉市図書館に関する情報が 48 万 3000 件。膨大な数ですよ。すごい数。あ、これで十分だ。全部に目を通すわけにはいきませんが、ある程度見れば十分だ、とまあ、思いがちなんです。実はこの検索、善し悪しがありますよね。つまり検索で拾われないものは世の中には存在しないものだという構図・思考回路が出来上がる可能性があります。48 万 3000 件のほかにもたくさんあるはずですよ、鎌倉市図書館に関する情報が。世界はもっともっと豊穡なはずなのに、検索の網に引っかかったものだけが出てくる。

これを本当に痛切に感じたのが、僕の教えている学生たちと接しているとき。電子データ化に関する対し方が全く我々と違うんですよ。僕が研究室にいた時に、学生が「先生、ちょっと文章書いたんです。短編小説なんですけどすごく短くて原稿用紙 3 枚くらいなんですけど。読んでくれますか？」と。「あ、いいよ。読むよ」。でも、なぜか彼は携帯電話を出すんですよ、僕に。何だろうな、アドレス調べて送るってこと？と思ったら、携帯電話に小説を打ってるんですよ。液晶画面に浮かぶ細かい文字をずっと読むわけです。これが今の学生の「書く」っていうことか、と思ってそこでまずビックリした。

つまり、あまりにも身近なんですよ、電子データ化するというのが。携帯電話とかスマートフォンなどのツールで、「書く」身近さ。

身近なのだけれども、いや待てよ、こんな発想で文章を書いていていいのかな、とも思う。たとえばレポートの提出を前期とか後期の終わりに提出させますよね。じゃあ今回は昭和初期に日本文学史の一奇跡、ミラクルと言われた梶井基次郎について書いてみてください、あるいは『豊穡の海』という大作を著した三島由紀夫についてレポートを書いてきなさい、と提示します。そうすると、学生たちというのは「レポート」は、すなわち「検索」なのです。「コピペ」。コピペっていうのは、コピー&ペーストの略です。さっきのグーグルで「梶井基次郎」でも「三島由紀夫」でも入れます。そうするとやっぱり何十万という数がダラッと出てきます。それなりにいい情報があるとそのままコピーして、ペースト・糊付けして提出しちゃうんですよ。コピペ。まあ、300 人くらい学生いますよね。読んでみると、三島由紀夫に関して同じ文章のレポートが出てくる。ご丁寧に写真まで同じ位置なんですよ。「おいおい」と。がっかりしちゃいますよね。

ところがある日ですよ、夢野久作のレポートを出させたとき、ちょっとこれはインターネットからコピペしたものじゃないな、というものがあつた。できる、こいつ。大学院レベルだな。と思って読んでいくと、「この原稿を書いた昭和 42 年時は」と書いてある。まだ君、生まれてないじゃないか。せめて「読んでからコピーしろっ」て言うんですよ。学生は、コピーしてペーストするのが当たり前。彼らの「調べる」とは検索なのです。

電子データ化を考えた時に、学生は、直にあたるわけでも調べるわけでも歩くわけでも書いたわけでもない。今回の震災に関してどう思う？と聞くと、きっと自らの言葉はないのかも知れない。インターネットから得た情報をそのまま持ってくるのではと思います。口頭でしゃべるにしても、報道で伝えられた情報を持ってくる。検索神話に浸っているわけですね。

インターネットは軍事的にも利用されますが、9.11 のあのテロ事件が終わってから 2001 年、ラムズフェルト元国防長官が、新しい戦争が始まったといったのは象徴的です。ミサイルを飛ば

すだけではない。オフショアの金融センターでの移動を追跡し、電子的な戦いも進めると言いました。

また、最近、サイバーウィルスを開発したと言うリン副長官の情報が流れた。インターネットの情報を操作されるということです。一昔前だったら武器を売りつける商人、軍事産業に携わり、巨利を貪る人々を死の商人といいましたが、今は情報を売りつける商人、知識の商人が、死の商人になる。いや、いつのまにか病だれの知に翻弄されて、痴の商人になるんじゃないかという危機感がある。

インターネットは即効性があり、便利です。即時的情報をジャーナリズムが一番に駆使すると思います。即時的情報はジャーナリズムの使命ですが、正確に伝えなければなりません。でもインターネットだけで取材しているジャーナリストは世界に一人もいないはずなのです。事件や動きの背景、歴史はインターネットで調べるかもしれませんが、とにかく自ら必ず現地に向かい、人と会って、情報を得ています。ジャーナリズムとしての義務です。早く正確に、伝えなければならない。

我々文学者はどうか。今、3月11日以降、いくつかの震災をテーマにした作品があります。以前鎌倉に住んでいた作家高橋源一郎さんは、実験的な作品を書いて震災をテーマに進めました。古川日出男さんは福島出身の作家の方ですが、彼は、その時は、東京にいましたが、いてもたってもいられなくなって、被災地に向かいました。自分自身を育ててくれた土地が壊滅的な状況で、言葉も現実も自分自身バラバラになった状態。そのバラバラになった状態をグーッと詰めながら、真剣に自分が今受けた印象、思いを正確に、綴った小説を書いています。

或いは、川上弘美さんがずいぶん前に書いたおとぎ話的な作品があります。「くまさん」という作品で、どうぶつのくまと川にピクニックに行く内容の作品ですが、それを今度ある部分だけ変えて、震災後という設定で、以前と以後の違い、或いは未来の問題、幸福の問題を浮き上がらせるために書いた。

早くに書かれる方もいます。どれも非常に僕は優れた作品だと思って読ませていただきましたが、文学はジャーナリズムとは違って、即効性ではなくむしろ遅効性です。遅い。遅いと言うことは何かというと、社会や時代、事件、事象を、様々なるものをいかに捉えるか、自分の中で練り上げ、抽象化し、異化する。異化と言うのは異なる化、日常的に見慣れた素材を次元の異なるものに変化させる手法。さらにそれを膨らませていく。言葉にして提示していく。作家、文学者、芸術家は時間をかけて自らが其処に降りていく。言葉が無かったらずっと待つ。安易に言葉に頼ったら、近代システムの罠にからめとられる。本質、実質を見つけ出して、ようやくこの言葉をつかんだ、現実に戻れる、そこから浮上して作品として提示する。ジャーナリズムの即効性とは違い、遅いのですが、本質を練り上げ作品として提示するのが文学です。

確かに電子化は非常に便利だし、場所も取らない。効率的で、ジャーナリストも文学者も使いますが、でも検索の問題があります。検索神話は心性にいつの間にかくいこみ、蝕んでくるので、ここは注意した方がいい点です。

100年を迎えた鎌倉市図書館が扱っている本、いろいろな新聞等の電子化がありますが、本も電子化される運命にあるのでしょうか。

これは違うんだろうなと思います。もちろん、消費されるもの、軽い読み物みたいなものは電子書籍されて、むしろ電子化された方が嬉しいという作家もいるでしょう。

皆さん好きな作家さんを思い浮かべてください。夏目漱石、三島由紀夫、谷崎潤一郎、僕は、先程言いましたが梶井基次郎が大好きです。梶井基次郎……おれにとっての梶井ってなんだろうと考えた時、テキストだけじゃない。こんなことを言っているのか分かりませんが、学生時代、梶井基次郎に憧れて、あんなふうになりたいと思っていました。あの人は物語を書きません。例えば、自分が肺結核で療養していて、温泉地で牛乳を飲み、その牛乳瓶に蠅が紛れ込む、その蠅が牛乳を引きずってびんの内側に白い筋をつける、そういうものを描写する。あるいは、桜の木の下には死体が埋まっている。これは信じていいことなんだ、あんなにきれいな桜が咲くなんて、対極にあるものが下に埋まっていなければおかしいではないか。美と醜の問題。

或いは、有名な『檸檬』という作品があります。自分がなんとなくぼんやりとした不安を抱えて、何で生きているのかという徒労感を抱えていて、それを紛らわせるのが八百屋の店先にある一個の檸檬。この重さ、冷たさ、いい匂い。そうだ、いたずらしてやろう。享受してきた近代芸術をぶっこわしてやろう。大好きな丸善に行って、よく見ていた画集を積み重ね、その上に檸檬という時限爆弾をおいてデパートから去るという短い作品ですが、感覚がかなり特殊で繊細、むしろ獣的のといっているいかも知れない、やはり日本文学史上の一奇跡です。

人間の言語では書けないような五感、聴覚、視覚などの感覚を統合して、一番ぴったり当てはまる形容を持ってくる。見ているものを聞いているものとして表現したり、聞こえるものを視覚として表現したりする作家梶井基次郎を、僕は若い頃読み込みました。僕は作家になる前、編集者だったんですが、その前はパチプロだったんです（笑）。大学卒業後どうにも食えない。新潟にいるおふくろには、大学院に行くわ、などと嘘をついてね。「あんたよかったわね」といわれましたが、でも明日食う金がない。土方をやったりしました。当時、原始的なパチンコでしたので、釘が読めたんですよ。それでなんとか数ヶ月くらい過ごせた時期がありました。パチンコ屋のタバコ臭い中、いつも梶井基次郎の文庫本がジーンズのポケットに入っていた。それが矜持だった。おれにはこれがある。何度も読んでるから、カバーもボロボロ、いつのまにか、年季の入った革みたいになって、そのうち文庫本自体が破れて二つに分かれちゃったりして。で、分かれた二つを一緒にしてポケットに。そのあり方全てが私の梶井基次郎なんです。一体、梶井の話と電子書籍化と関係ないんじゃないかと思われるかもしれません。

鎌倉の西御門に住んでいた文藝評論家で、お亡くなりになりましたが、江藤淳さんという素晴らしい文学者がいらっしゃいました。この方は夏目漱石の研究者ですが、漱石神話を介して作家の闇を照らし出した「夏目漱石論」でデビューした文芸評論家でもあります。近代の問題を追及した『成熟と喪失』という名著があります。戦後、GHQにも積極的に発言しました。1933年に生まれ1999年になくなった一流の評論家であり研究者。あまりに知的な文学者でしたから、本の風情などという情緒的なことは関係ない人なのかな、と僕は思っていました。ですが、『な

『なつかしい本の話』(新潮社)というエッセイ集の中に入っている、夏目漱石の『菴露行(かいろうこう)』について書かれた作品があります。菴露行というのは、葬送の時に棺をひく唄、挽歌です。漱石にはユーモラスなものも実験的なアバンギャルドなものもありますが、この菴露行は難解。この難解な本を活字だけで読んでいてもわからない。単行本の装丁とあいまってわかる本の魅力について江藤さんは語っているのです。

「(引用) --- 本というものはただ活字を印刷した紙を閉じて製本してあればいいというものではない。つまり、それは活字だけで出来上がっているものではない、沈黙がしばしば饒舌よりも雄弁であるように、ページを開く前の書物が、すでに湧き上がる泉のような言葉を溢れさせていることがある。

その意味で本はむしろたたずんでいる一人の人間に似ているのである。---

本はたたずんでいる一人の人間！ まさにそうです。

「あるいは、テキストというものも時には本が意味しているもののほんの一部にすぎないかもしれない。本からテキストを切り離して研究の対象とするのは、どこか血の気の失せた仕事にしまいがちなる理由もそのへんにあるのかもしれない。そのことをわたしはここしばらく夏目漱石の『菴露行』について考えているうちに痛感した。その菴露行という難解な意味は、漱石全集でテキストだけを読んでも恐らく本当はよくわからないのかもしれない。」

一流の研究者である江藤淳さんでさえ、漱石全集の内容だけ、つまりテキストだけ読んだのでは分からない所がある。なぜなら本は、作家そのものでもあり、人のたたずまいそのものだから。活字、フォント、装丁、全て含めて文学だと仰っている。『なつかしい本の話』のフレーズを見たとき、自分がこだわってきた書籍、文学系の電子データ化への距離感はこちらなんだと思いました。本はたたずんでいる。その人の醸す雰囲気、息づかい、匂い、あるいはその人の抱えている本質を知りたいと思った時、インターネットでは無理です。一人の人間の生、ドラマ、様々なものを抱えている、インターネットだけで感じられるか。じゃあどうするか。人間について知りたかったら、会いますよね。会って話をする。時には罵りあったり、抱き合ったりするかもしれません。慈しむことも、けんかして殴りあうかもしれません。実際にその人の息づかいを感じる、本の息づかい、思想の息づかいを感じる、それが「知る」ということ。人のたたずまいそのものである本も、同じなのです。考える人間、感じる人間、表現する人間を知ることです。

江藤さんは字面だけではない、と言っていますが、本に対する思い、江藤淳さんのおっしゃるたたずまいという考え方。その対極にあるのが、今の原発の問題だったりします。人間が人間として制御できないシステム、世界。それはそもそも不自然で不要で必ず破綻するものです。人間が人間の手で、頭で考える、原子力村ビジネスの無理は今、明らかです。やたら発達、合理化、目標にまい進する。経済効率という言葉は、いいことに思われがちですが、人間が制御できない

所までいったらアウトです。

ドイツの有名な科学者が言っていました。科学を進化させることへの努力、発明や発見などを通して、自分たちはいろんなエネルギーが作ることでできるだろうが、あえてやらないのだと。なぜならそれは、人間として罪だから。制御できないから。あえて止めておくのが本当の科学だとおっしゃっていました。たぶん、これには戦時中のナチへの反省も含まれていると思います。この科学者の言葉はすごく豊かだなと思いました。

人間にとっての幸福とは何なのか。それを追求して行って、それに基づき、科学を、文学を、哲学を、芸術を作っていくのが本物の知性ではないでしょうか。

人間と言う概念。人間とは何なのか。人という世界のイメージを絶えず検証、考察し、研究し、反省していく作業が本物の知性であると思います。

学生たちはネットの情報をそのまま使ってしまう。コピーばかりやっている学生は、全く自分の頭を使いません。「本物の知性ってなんだと思う？」と聞いてみるといろんな答えがあるでしょう。

最終的な答えは、生きていく力です。人間という概念はさまざまに変形させられますが、情報に惑わされずに自分自身のことばで考える。この作業が大事。時には迷ったり、逸れたり、見失ったりすることもあるでしょう。

我々自身が制御できない原子力。近代システムの破たん。致命的な災害だと思う。その災害から身を守る、あるいは災害を起こさないために、3.11以降、災害を起こさない文明のあり方については、皆さんが、今までにないくらいの重みで考えていらっしゃるのではないかと思います。江藤淳さんのように文化の源である、一冊の本が教えて下さることもあると思う。

若い人たちはけっこう真面目で一生懸命で、一途です。それに夢があります。小説を書きたい、作家になりたいという。じゃあ書いてごらんとする。

あるテーマ素材について、とにかく書いていく。それを徹底的に調べる。インターネットを多少使ってもいいが、でも網から漏れているものはごまんとある。土地を舞台にしたら、そこへ行く。学生が土地に行って、空気の匂いを感じる、風を感じる、人と会話をする。ネットじゃわからないですよ、いってくるようになる。

それが江藤淳さんの言う、文化のあり方、知のたたずまいということですよ。

鎌倉市図書館が100年間、ずっと大事にしてきた本は、文化の根底です。基本ですよ。自ら本を読み、思考し、表現する。鎌倉DNAをもった我々が本や文化を愛し続けた、一つ一つの積み重ねの結果だと思います。

僕は今回の震災で2、3週間失語症のようになりました。自分の小説スタイルがこれで変わるのかとも思いました。今までの自分の小説ってなんだったのかと心の底に耳をすましてみると、「いいんじゃないか」と。われわれ鎌倉人が、ずっと持っているスタイル、常識、価値観、モラル、既成のものを疑って本物を見つけ出す、それをもとめて書いていたんじゃないか。それは全然変わらない。

震災をモチーフにしても、まったく触れなくても、人間を描けばそこに届く。

これから文化、教育、芸術、政治、思想のあり方が変わってくる、でもいい方向に行くのではないかと思います。半面、インターネットの情報は便利ですが、絶えず検証する必要もある。それを考えながら、文化を築き、自分自身を作り上げていきたい。

文学、思想、芸術は無力だと言った若き編集者に先日会いました。たぶん、基準を設けず、生身の人間を書くのは、やはり文学しかない、と彼は言っていました。分かってくれたんだと思いました。リアル病になり、パニックになり、放射能から逃げなくちゃと思い、親しい人にしか声をかけなかったみたいですが、もちろん僕だってそのあり方は本能として分かる。避難をして自分を落ち着かせたとき、一つ一つ言葉が蘇るようになり、再生の物語が生まれた。編集者の彼の中に生まれた言葉は、小説、文学に近いだろう。哲学、思想かもしれません。情報に惑わされず、自分の中で考える、それがすごく重要な時間だったと話してくれて、良かったなと思いました。

鎌倉市図書館も 100 年を迎え、様々な貴重な本が電子化される部分もあるかもしれません。江藤淳さんの言った本、人としてのたたずまい、その心、思いを大事にしていきたいし、それが人としての幸福、本物の文化につながるのだと思います。

最後に 100 周年を結びつけましたが、時々鎌倉市図書館を利用させてもらおうと、鎌倉にしかない、他に無いものがたくさんあります。ましてや神奈川で一番古い。この市民の文化レベルの高さ、鎌倉 DNA を自分の中で高めていって、ご自身の豊かな生活を築いて行ってもらいたいと思いますし、私もやり続けようと思います。

ちょうど時間になりましたので終わります。ご清聴ありがとうございました。

「文化による日本の再建 ～都市の役割～」

文化庁長官 近藤誠一氏



近藤誠一氏プロフィール：

1946年神奈川県生まれ。東京大学卒業後、1972年外務省に入省。外交官として要職を歴任。ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、デンマーク特命全権大使を経て2010年7月より文化庁長官。ユネスコ大使時代に石見銀山の世界遺産登録を実現され、平泉の推薦にも尽力。

ただいま、ご紹介いただきました近藤誠一でございます。文化庁長官というポストに就いてからちょうど1年ということになります。

まずは鎌倉市図書館開館100周年、誠にありがとうございます。記念すべき日にお招き頂いて大変に嬉しく思っております。私がなぜこの場にお呼び頂いたか、理由の一つは、生まれは逗子ですが、中学高校を鎌倉で過ごしております。ですから、私も藤沢先生のおっしゃる鎌倉DNAの一部を持っています。鎌倉で過ごし、ここの文化に触れたことをとても誇りに思っています。

東京から1時間ほどで来られますので、この1年間、何回か来ていますし、この前も円覚寺の朗読会に参りました。

神奈川県出身、逗子生まれで、第一中学校、湘南高校2年まで、鎌倉の大町、元八幡の近くにずっと住んでいました。

外務省に入って38年、40年近くを過ごして参りました。そのうち半分が日本、半分が外国という暮らしでした。最初の20年は日本が上り坂で、大変勢いがありました。そのあとの20年、バブルがはじけてから内向きに元気がなくなり、閉そく感があふれました。前半・後半の各20年の間、出たり入ったりしながら日本を見て参りまして、そこで感じたことを今日はお話したいと思います。

いわゆる3.11、東日本大震災で、日本人誰もが「いったいどうしたのか」、「何がいけなかったのか」、何ができるか、というそんな疑問を持ったことと思います。私も同じです。

今の立場で何ができるか。個人として何をすべきかを考えました。その一端をご紹介して、最後に若干のお時間をとって、ご質問をお受けしたいと思います。

今日の仮タイトル「これからの文化の話をしよう」は、どこかで聞いたことがあるタイトルだ、と思われた方もいらっしゃると思いますが、有名なマイケル・サンデルというハーバードの

先生の『これからの正義の話をしよう』のもじりです。これはサンデル先生が学生とやり取りしながら講義をするもので、日本でもずいぶん評判になりました。昨年 8 月、東大の安田講堂で 1000 人の学生相手にサンデル先生が講義をした時、私も興味があつて行きました。卒業後にはじめて行ったのですが、非常に面白いなと思って、サンデル先生に翌々日お会いし、さらに 12 月にハーバード大学にも行って教を乞うてきました。

私の担当である文化というものは、誰もが良く知ってはいるがよくわからない。「文化とは何か」とか、「政府は文化に何をすべきか」ということについて、おそらく正解は無いと思います。1+1=2、という数学には正解があるが、文化にはない、正義にも正解がない。だから考えなくていいのではなく、だからこそ考え、議論をし、他人は、自分は何を考えているか、やりとりをしながらお互いに啓発し合うのが大事です。正解がないからこそむしろそれができます。算数の先生と 1+1 について議論してもしょうがない。「正義とは何か」、「文化とはどう扱うか」、という問題、これも正解がありません。一人ひとりには正解を持っていますが、持っている正解では不十分。これからもっと我々が文化とは何か考えなくてははいけません。そういうきっかけになればと思い、今日やってきました。終わったらすぐに東京に帰らなくてはなりません。成就院のあじさいをみるのが楽しみで来ましたが、時間がないようです

文化とは何か？なかなか答えようがありません。あまりにもとりとめがない。シンデレラと人魚姫の話は皆さん読んだことがあると思います。子どものころにディズニーのアニメをご覧になるとか、マンガで読んだり、子どもの絵本で読んだ方が多いと思います。

筋はお忘れかもしれませんが、これから二つの何が共通していて何がちがうかをお話します。

シンデレラはママ母と 2 人のお姉さんにいつもいじめられますが、ある日、魔法使いが、王子様がお妃を探すダンスパーティに行かせてあげます。ガラスのくつをはかせ、きれいなドレスを着せて、「12 時になったら魔法が解けるからそれまでに帰りなさい」。喜び勇んでシンデレラは宮廷に行きます。運良く王子様に見初められましたが、12 時にあわてて帰る時に片方の靴を落としてしまう。王子様はなんとかシンデレラを探したい、この人こそ自分のお妃にふさわしいと、靴を頼りにシンデレラを探す、最終的にシンデレラを見つけ出して結婚するという典型的なハッピーエンドです。

一方、人魚姫は、15 歳になって海の上に出られるようになる。嵐がきて、船が難破して、イケメンの王子様が倒れていて、おぼれそうになっているのを彼女は助けて戻ってくるが、それ以来、人魚姫は王子さまに恋をして、なんとか人間になって王子様のそばにいて結婚したいと願います。ある日、決断をして、海の魔法使いに会いに行つて希望をいうと、「人間の姿にしてやる事は出来るが、条件が二つある」と。一つは口をきくことができない。この写真の人魚は足の形になっていますが、デンマークのコペンハーゲンにあるバレエ劇場で、人魚姫のバレエをやっているのをカールスバーグというビール会社の社長が見てぜひ像を造ろうと言って彫刻家に頼んだものです。プリマドンナをモデルにしてこの像を造ったのですが、あまりに足がきれいな

で、魚のしっぽにするのはもったいないので、足にしました。第二の条件は人魚姫は人間の足を持つことができるけれども、歩くたびにものすごく痛いというものです。つまり、口がきけず、足が痛い、この二つを我慢するなら人間にしてやろうと。人魚はすぐに「イエス」とこたえて、人間になって王子様のところに行きます。

口がきけないので自分の気持ちや王子を助けたことを言えません。そのうちに王子様は隣の国の王女さまと結婚してしまいます。絶望した人魚姫は、王子様を剣で殺せば助かるのに、できない。そのまま命が絶えてしまいます。しかし最後は空気の精によって 300 年後に魂が救われます。

末娘が苦勞して目的を遂げようとするのは共通ですが、シンデレラは努力すれば達成できる、目的が叶う、アメリカンドリームで子どもたちを勇気づけるアメリカ文化そのものです。一方、アンデルセンは辛い努力をしても王子様とは結婚できないという悲しい話です。でも、魂は救われる。キリスト教的と言っていていかもしれません。この世では惨めな結果でもあの世では救われると言う教訓かもしれません。

アメリカとヨーロッパの単純化した文化の違いと言えるような気がします。

文楽はご存知かどうか知りません。東京の国立劇場で最初に観た作品を紹介します。有名な作品ではないかもしれませんが、初めて観たということと、ストーリーに非常に感じるがありました。

「勢州阿漕浦（せいしゅうあこぎがうら）」です。ブルーの着物を着ているのが、平治という主演です。

平次には奥さんと一人息子がいて、更に病気のお母さんがいます。平次は由緒ある家の人だが伊勢近くの漁村にわけあってすんでいる。

奥さんも由緒ある家柄のお嬢さんだが平次と一緒に暮らし、病気の母親の面倒を見ています。

お母さんの具合が悪くなり、お医者さんに相談すると、医者は近くの海で取れるある魚を食べさせれば治るといいます。しかし、このあたりは殺生が禁止されています。平治はお母さんのために法を犯すか、それとも掟を守って魚を取ることをあきらめるか、悩んだ末、ある日船をこぎ出します。網をかけると、上がってきたのは魚ではなく、一つの光る刀でした。それは、見てすぐに彼のボスである坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）という偉い将軍が探している、彼の家の権威を示す三種の神器のようなものと分かりました。これを届けることで恩を果たせると持って帰ろうとすると、運悪くある男に見つかりました。左にいる治郎蔵という男です。もみあいになり、平次はなんとか刀を持って家に帰ってくるが、運悪くかぶっていた笠を落としてしまいます。その笠には「平治」と名前が書いてあります。案の定、翌日治郎蔵がやってきて、密漁したのはおまえだろう、掟通り縄にぐるぐる巻きにされて海に放りこまれることになる黙ってやるからその刀を俺に寄越せというやりとりがあります。そこへ代官さまがやってきて、「平次、お前は禁を犯した、逮捕する」、と言うと、治郎蔵が「やったのはわたしだ」と名乗り出ます。実は治郎蔵のお父さんが大変世話になった恩のある家庭の子どもが平治でした。それで平次を救おうとしました。お代官さまはそれを見抜きますが、治郎蔵の恩返しの気持ちを理解し、

治郎蔵を捕まえ、縄で縛って海に落としてしまいます。平治は助かって、刀を田村麻呂に返して褒美をもらい、奥さんと病気のお母さんと息子と末永く暮らしたという話です。

この話には色々な要素が入っています。サンデル先生に話をしたら非常に興味を持ってくれました。アメリカでは、法の支配、つまり法律をしっかり守ることが正義を守るのに一番大事なことです。その観点からだとこの話の結末はどうか。罪を犯したのは平治です。治郎蔵は無実なのに、裁判官は全てを知った上で死刑にする。法は守られていない。法を守る裁判官が法を破っています。アメリカ人であればこんな理不尽な話はないと思うでしょう。

日本人であれば、そんなものだろうな、と思いませんか。

治郎蔵はこれで恩返しを果たせるとある意味喜んで死んでいった、平治もそれを見るのは忍びないけれども、彼のお父さんに恩を返せて治郎蔵はハッピーに死んでいくし、田村麻呂に刀を返せる、薬を買えて病気のお母さんも助かる、とあって、自分を説得したと思います。日本では親への孝行、主人への忠、人情、世話になった人に恩を返すという気持ちが強い。正義や法の支配より、そういうものが優先する社会だと思います。つまりちょっとした童話であれ、文楽であれ、文化の違いがはっきりでてくると思います。

このように、国や地域によって文化が違う。なぜ文化というものが人間にとって必要なんだろう、必要でないにしてもなぜ文化というものがあるのだろうと考えざるを得ません。

人生に文化はあまり必要ない、食べていければ、生活できればいいと考えている方はいらっしゃいますか？ ゼロですね。普段はサンデル先生方式で、学生相手にはこういうやり取りをします。今日はこれ以上の質問は差し控えますが、文化は不要という人がゼロなのは今日のテーマが文化なので、いらないというのと叱られると思うのか。鎌倉は文化人だからか。どっちか、両方かもしれません。

南フランスのラスコーという洞窟に壁画があります。歴史の教科書に出てくることもあります。クロマニヨン人という古代人が描いた壁画です。牛や鹿などがダイナミックに描かれていて感動的です。私は見てびっくりしました。寒さにふるえ、飢えに苦しみ、野獣の声におびえていたクロマニヨン人が何故このような感動的な絵を描いたのだろうか。

おそらく人間には気持ちや感じたことを表したいという衝動があるのではないのでしょうか。そして、人が表現した感動を共有、共鳴することを大事にするそういう所が、人間が他の動物とはだいぶ違うところではないのでしょうか。感動とは、いい獲物が捕れたことへの感謝かもしれないし、明日もいい獲物が取れるようにという願い、宇宙を支配する神さまのようなものや偉大なものへの尊敬・畏敬の念かもしれません。子どもがちゃんと生まれます様に、健康であります様にとというようなお祈りかもしれません。何かわかりませんが、自分の思いを何かの形で表現したいという気持ちが人間にあると思わざるを得ません。藤沢先生のように小説という形で表す方もいます。

従って文化は人間に不可欠なものだと思います。その文化は我々の生活にどういう意味があるのでしょうか。

藤沢先生が、震災直後に、編集者から文学は無力ですねと言われたと言う話をされていまし

た。ちょうど 3.11 のあとに、文化関係者と話しましたが、「アートは役に立つだろうか」と、ピアニストも、落語家も、みんな口々に言っていました。いいことをやっていると思っていたが、津波を見て、非常に無力感を感じたと。アートは必要なのか、社会に貢献しているだろうかと真剣に考えたようです。でも数週間たって、必要だ、役に立つんだと考え始めました。

私なりに文化の役割をいくつか求めてみました。

まず、文化は個人に生きる力を与えます。ここにあるのは禅の関係の文章です。

——讚嘆随喜する人は得ること限り無し（白隠禅師座禅和讃）

落語がガンに効くという話がありますが、これが科学的に証明できるのか、と思っていましたが、分子生物学の大家、村上和雄筑波大学名誉教授から、次のようなお話をうかがいました。

まだ、科学で人間の心は分析できていません。しかし、感動、落胆すると体にいい影響、悪い影響を与えることは証明されています。難しい話で私も理解できていませんが、人間には遺伝子がたくさんあります。しかし、実際使っているのは 2%だけで、98%は使われていません。遺伝子には良い遺伝子と悪い遺伝子があり、ものすごく感動すると、眠っている中の良い遺伝子がスイッチオンになり、それによって元気が出て、病気を治すのだそうです。いろいろな実験をして、アメリカの医学界でも注目されているようです。先ほどのラスコーの壁画を見て、私が感動して、元気になった。音楽会に行くとベートーベンを聴くと疲れていても元気になる。そういう力が文化や芸術にはあります。

もうひとつは社会的役割（連帯を強める）。

文化芸術に携わっていると、一緒に絵を書いたり、劇をやろうということになり、演劇がうまければ、学校でも英雄になれます。学科だけで生徒を評価するのは良くない。人間にはいろいろな才能があります。算数や国語でいい点を取る子もいれば、これはだめでも別の分野で力を発揮できる子もいます。特に芸術は幅が広い。社会の連帯を強める力があるといえます。

もう一つは経済効果。

文化、芸術が栄えれば産業が生まれ、地域も発展します。平泉が世界遺産になりました。四年前に世界遺産になった石見銀山は、世界遺産になった途端に観光客が増え、若い人も地元に戻り活気が出てきました。そういう効果がでることははっきりしています。

もう一つは国際的役割。

海外から日本を見ると、日本の良さ、すばらしさは日本の文化にあります。マンガ、アニメは大変な人気で、日本のイメージを上げています。スシもブームで、ナショナルブランドにもなり、日本に行ってみようという人も増えます。日本に来ている若い人にきくと、来日のきっかけはマンガかアニメという人も多いようです。外交の分野では、文化の力、ソフトパワーということばが流行っています。このように文化というものはいろいろな役割を持っています。

その力を日本は十分使っているでしょうか？

世界での日本のランキング。経済面では、中国に抜かれましたが、GDP は現在世界で 3 番目。

一人当たり GNP は 17 番目。競争力という指標もあり、それも 6 番目。

社会面はどうでしょう。

日本人は世界一寿命が長く、犯罪率もたいへん低い。

それらを合計した総合ランキングがあります。UNDP（国連開発計画）が作っている人間開発指数、リーダーズダイジェスト誌の「住み良い国」、ニューズウィーク誌の「ベストカントリーズ」、いずれも 10 位前後で素晴らしい結果です。デンマークも同じくらい。これだけの数字を、日本を知らない人が見たら、日本はなんて素晴らしい国なんだろう、経済面でも社会面でも豊かで長生きし、競争力もあり、日本人はさぞかしハッピーな国民だろうと思うでしょう。しかし、調査によると日本人は幸福だと思っていない。デンマークは世界で一番幸福だと思っているが、幸福度は日本は 90 位。これはどうしてかと思えます。

幸福の裏返しですが、自殺が多いですね。先進国の中では日本は 3 番目に自殺が多い。デンマークよりももっと多い。北欧は自殺が多いといわれますが、それよりも多い。どうしてこんな素晴らしい環境にありながら、日本人は幸せと感じていないのか。本当は誰もがうらやむ国のはずです。

38 年間、内外から日本を見て感じた結論は、客観的に見た数字と我々の幸福度のギャップは戦後の経済成長偏重にあると思えます。戦後の 20 年ぐらいは、全ての資源を経済に投資し大成功しました。成功したが故に、幸福になる為の「手段」である豊かさ自身が「目的」になってしまった。経済の数字が悪いとしょげてしまう、本来心を豊かにする文化芸術の力を忘れてしまった。子どものうちから、そういうものに接する場を十分に設けなかったということです。

それをデータで見てみたいと思えます。

政府が文化にどれくらい予算を使っているか、諸外国との比較です。上のグラフは政府総支出に占める文化予算の割合です。

フランス 1% 近く、韓国も多いです。アメリカは政府の力を使わず、寄付で財団やお金持ちが文化を支えています。日本はどっちでしょう？どっちでもない。政府も予算も少ないし、寄付もあまり無い。文化に必要なお金が回っていません。

鎌倉市は文化予算の比率は高いと思えますが、都道府県はざっと見るとどんどん厳しくなっていて文化予算は減っています。

企業メセナ、企業の文化活動も、景気が良い頃は一時期少しお金を出していましたが最近停滞しています。政府も地方政府も個人も企業もあまりお金を出していません。

個人の生活において、どのくらい一日にレジャーに使う時間があるかという点、先進国で日本は 2 番目に少ない、睡眠時間についても一番眠らない国民です。フランス人が一番眠りますね。「悪い奴ほど良く眠る」と言う映画もありました。ヨーロッパの人はよく寝て、レジャーに時間をかける。それでも経済発展する。

日本人はいろいろ切り詰めて、それでも経済発展しないので落ち込んでしまう。そんな悪循環があります。

では文化を味わう環境にないのかということとんでもない。素晴らしい人材がいます。国際映

画祭でしょっちゅう賞をとり、女子サッカーのなでしこジャパン、ゴルフ、スケート、オリンピックで大活躍、ノーベル賞も去年 4 人受賞しました。戦後、科学分野ではアメリカに次いで 2 番目の受賞者数です。個人はみんなスポーツでも芸術でもがんばっています。世界遺産は今年は平泉と小笠原が登録されて、合計 16 になりました。鎌倉が何番目になるか楽しみです。世界遺産以外にも素晴らしい遺産がたくさんあります。有形に加えて、無形文化財、能、歌舞伎、文楽、芸能、お祭りなど、伝えられてきた目に見えない匠があります。

日本ほどお祭りが盛んな国はありません。中国も文化はありますが、いろいろな民族が支配したり、征服されたりするうち、どんどんとお祭りがなくなってきました。日本は多くのお祭りが残っています。最近、仙台で東北六魂祭といって、ねぶた、花笠おどり、竿灯、さんさおどり、わらじ祭り、七夕をまとめて行いました。6 つの魂を沈める祭りをやりました。日本には大小あわせて大変な数のお祭りがあります。

法律的にも、憲法第 25 条で、すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有するとあります。戦後すぐに文化財保護法という素晴らしい法律を作りました。無形文化財という考え方を導入し、人間国宝を考えたのは日本です。それが世界に広がっている。21 世紀になってからも文化財だけでなく音楽、演劇等を振興しようという法律ができました。

アメリカの学者がクリエイティビティ・インデックス、色々な要素を加味し、各国が創造性、クリエイティブな要素をどのくらい持っているか、専門家が指標を作りました。

自己表現指数、日本は 0.68 ととても低いです。日本人は自分を表現することが下手です。恥ずかしがりやだったり、謙遜したりします。創造性を発揮するにはマイナスで大きな差をつけられています。しかし、イノベーション、テクノロジーなど他の指数を合計すると第 2 位です。潜在的には大変な創造性を持っているのです。それだけのものがありながら日本人は文化を望んでいないのか？

内閣府の「あなたは心の豊かさと物の豊かさを求めるか？」という調査があります。高度成長期は相半ばしていましたが、最近はだんだん心の豊かさを求める人が増えています。素晴らしい文化財があり、才能を持った人がたくさんいる、世界一の地位にある人がたくさんいる。心の豊かさを求める気持ちも強い、なのになぜ文化が根づかないのか。国の力にするにはどうしたらいいのか？

私はこうした個々の力を国全体の力にまとめるシステムがないからではないかと思います。日本人の持つ勤勉性、才能を経済発展に結びつける仕組み、それはうまく行きましたが、文化の力に結びつけるシステムを作るのに失敗し、後回しにしているうちに忘れてしまった。どこからどう手をつけるのか、60 年の流れをひっくり返すのは簡単ではありません。それぞれが意識を変えることが必要です。経済は手段であり、目的は「心の豊かさ・幸福」だということを思い出し、学校でも職場でも家庭でも実施する。会社にお勤めの方もいらっしゃるでしょう。今日は音楽会に行くからお先に失礼と会社を出ることができますか？ 周りの人からどう見られるでしょう？ なんとなく、胡散臭い目で見られたり、言いにくい、残業しないと悪いなと思ってしまっているのではないのでしょうか。

しかし、欧米ならそんなことはありません。オペラに行くと言えば「楽しんで来い」。「俺も明日は美術館に行くんだ」と言ってくれる。職場の雰囲気は大事です。もっと文化を大事にするカルチャーをつくる。後は、制度面で政府も企業も予算を芸術文化にもっと向ける、無駄遣いではありません。産業が生まれ、人々も元気が出て、大きな力になる。それは社会の力となって活性化につながります。寄付も非常に低い。3.11以降、寄付やボランティアの動きはありますが、まだ十分に根付いたとはいえません。寄付しやすいような税制など制度面の改善も必要です。観光も単に温泉に入るのではなく、文化財を楽しむ、眠っている文化財と観光を結びつけることも大事です。

今日は鎌倉市に伺ったということで、都市が大変重要な役割を果たすことを一言申し上げます。これからは都市の時代、地方主権だと最近言われます。国というのはサイズが中途半端です。防衛、テロ対策、地球規模問題を扱うには小さ過ぎ、一国だけでは対処できません。一人一人の健康医療にキメ細かく応えるには大きすぎます。時代の変化に敏感に対応することができません。今の日本の政治状況は特殊かもしれませんが、機敏に反応できません。国が中心であるこれまでの考え方から、思い切って、発想を転換する必要があると思います。これからますますグローバル化が進む中で、個人のアイデンティティ、自分がどこに属しているかという思いが高まるでしょう。そこで対象となるのは国よりも都市や地域だと思います。みなさんは自分を日本人と思っているでしょうが、鎌倉DNAを持っているということがいざという時の心のよりどころでしょう。

都市は祭りのように、土地の歴史や伝説に根ざした素晴らしい価値を持っています。

誰にも負けない価値があります。それらをベースにして人々が固有性を持ちつつ世界を見ながら連帯していく。それには都市はちょうどいいサイズなのです。それに早々と気付いたのがヨーロッパの「文化都市」構想です。1985年から毎年特定の年を決めて、その年の文化を最大発揮させるものです。それでヨーロッパの町が活気を取り戻しました。

ユネスコやASEANも、創造都市ネットワークもつくりました。日本も文化庁が文化芸術を使って都市を再生する模範例を表彰するシステムを作りました。

ヨーロッパで成功しているのは、3つあげるとすれば、ナント市（フランス）、グラスゴー市（スコットランド）、ビルバオ市（スペイン）でしょう。

文化を柱として、町を復活させた成功例です。どうすれば都市が文化芸術で成功するのか。

ここで必要な条件は5つぐらいあると思います。ひとつは、知事や市長などリーダーが先進性を持ち、工場誘致は最低限必要かもしれないが、それだけではなく、文化芸術などで街を活かすのだという発想をもってリーダーシップを発揮し、文化に予算を配分する。そういう人がいるかないかで随分違います。先ほどのヨーロッパの三つの都市でも、市長さんがすばらしい先進性を持っていました。市民のサポートも必要です。そういう市長を選ぶ。ナント市はかつて栄えた造船業が衰退し、廃墟と化しましたがエローという人が、これからは文化だと言って市長に立候補し、当選し、成功した。

市民の理解と協力が必要です。そういう市長が誕生し、市の予算が確保できたら才能ある推

進者が必要です。芸術監督のような人がいないと。何をやったら自分の町はだれにも負けないか。それは歴史なのか、文化ならなんなのか、それらを見つけて重点的に予算を、人間を配置することが必要です。

最後の寛容性ですが、閉鎖的ではいけないということです。文化芸術に才能がある人がいて、鎌倉を活気づけたらいいと思う人がいたら、県外の人でも外国人であっても、受け入れてやらせてみるという思い切った心の広さが必要でしょう。実際にフランスのナント市は庶民が親しめるクラシックの音楽祭を始めています。7年前から東京で同じものを始めました。それが成功して金沢、新潟等でもやっています。それを始めた人はルネ・マルタンというちょっと変わった人です。そういう人をナントの市長は受け入れて大成功したのです。思いきって自分を主張できる人が必要です。サラリーマン的な発想では多分ダメなのでしょう。素晴らしい才能ある人を見つけてきて引っ張ってくるという思いきったことが決断が必要です。

そこで、鎌倉は長い歴史があり、文化財がたくさんあります。文化活動、お花もお茶も含めて盛んな街であることが実感されます。図書館も 100 年間の鎌倉の歴史を見てきた訳ですが、本当に素晴らしいコレクションがあります。藤沢先生が「知」ということをおっしゃっていた、知も広い意味での文化といえます。いかに醸成し、蓄え、これをみんなで味わうか、劇場、文化、ホールもそうでしょう。図書館は、本、これからは電子的なもの、写真もあります。鎌倉市図書館には関東大震災のときの写真がたくさんあることを、来るときの電車の中で知りました。東北で街を復興するときに、今回の災害の記憶、アーカイブ（記憶）、1000 年の歴史がなくなってしまう様にするには図書館が必要という機運が高まっています。文化創造都市を進める時、この歩みを記録する、蓄える、味わう、将来に伝えるという意味で図書館の役割は非常に大切だと思います。ユネスコでも、そういうことをメモリー＝記憶遺産として登録するシステムを始めました。

鎌倉市、逗子市も世界遺産のみならず、記憶遺産として申請して認めてもらえる価値あるものが沢山あると思います。

100 周年にあたり、ぜひ鎌倉の皆さんにも文化の持つ力を知って頂いて、生活のなかにこれまで以上に文化芸術を取り入れ、図書館をもっと活用し、市も図書館にそういうことをやる予算をつけて頂きたいと思います。そうすることによって鎌倉市は日本で他市に先駆けて文化で引っ張っていく都市となれる、文化で日本人を幸せにできると確信しています。

ありがとうございました。

質疑応答

司会／近藤長官、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、ただいまのご講演についてのご質問を受け付けたいと思います。会場担当がマイクをお持ちしますので、ご質問のある方は、お手を上げてください。

会場／豊富な文化外交を展開される中で、厳しい交渉の時に、日本の文化の特殊性を説明する中で理解を進めるきっかけになった経験があれば教えてください。

近藤長官（以下 K）／素晴らしい質問です。外交交渉で日本の文化、ソフトパワーがどう役立ったか。これはなかなか測ることができません。軍事力のようなハードパワーはミサイルで目標が爆破されることで効果がわかりますが、どういう効果があったかソフトパワーはわかりません。ただ、交渉では厳しいやり取りをしますが、一段落する中で珈琲や食事をすると、最近ほとんどどの外国人は、実は家の娘はマンガが大好きで読んでいます、とか、5歳の息子は誕生日になにをしたい？という寿司屋に行きたい、と言われてたりしますという人がほんとうに多いのです。間接的には日本のポップカルチャーや、それをきっかけに日本に来た人が深い伝統文化に感銘を受け、日本人の優しさに感銘を受けて帰ることで、日本人の優しさが交渉にも間接的に影響を与えています。ソフトパワーは数値で証明できないので、それがソフトパワーの弱いところか測れない所です。そういうところにお金をつぎ込むかと言うと、財務省は「いいえ」といいます。仕分けの人は文化を評価理解してくれていません。しかし長い目で見れば効果があると思います。

関連で申し上げます。パリから戻って外務省の文化交流部長をやっている時、イラク戦争がはじまりました。日本のNGOの人が2名、テロリストに誘拐されました。最終的に助かりましたが、その時のテロリストの声明文の最初に書いてあったこと印象的です。「我々は日本人を尊敬している。しかし自衛隊を送ってきた。だからけしからん」という風に始まるのです。

最初の一行、ふつうテロリストからは聞ける言葉ではありません。日本人の優しさ、繊細さ、マンガ、アニメブーム、そして経済援助もあります。欧米と違って日本の援助はいつも相手のことを考えています。無償で、使いやすいようにお金を出してきました。それが長年積み積もった評価になっています。長い目で見れば必ず日本の外交にプラスになっています。

実はサンデル先生と日本の特殊性、日本の文化について話をしました。また、先日、東京にいる各国の大使を集めた講演会があり、そこで話をしました。日本は自然を大事にして、一体感を持っている。西洋、特にヨーロッパでは人間は神に選ばれたもので、自然より偉く、超越している、自然はいくら使ってもいい、自然を使って自分の幸せを作る、自然は人間より地位が低いと見ています。それが科学技術を生んで生活レベル向上にプラスになっていることは間違いなく、それについては我々も感謝すべきですが、それが行き過ぎて自然を破壊しつつあります。藤沢先生が科学者の話をしましたが、自分がコントロールできないような科学は使ってはいけないというのは、本能的に分かるような気がします。人間も自然の一部です。自然の恵みを受け、ま

た今回のように自然が猛威をふるって災害が起こった時は真摯に受け止め、反省し、手を携えて次の恵みを待つ。

これを外国人に説明するのは簡単ではありません。英語で説明するとますますわからなくなる。あいまいさも日本文化の特徴だと思います。何でも黒白はっきりしたがるのが英米人です。それはそれで便利なこともあるのですが、日本人はああでもないこうでもないと考えます。選択肢に「大好き」、「いくらか好き」、「どちらかといえば嫌い」、「大嫌い」という項目があると、真ん中が多いです。アメリカは両端が多く、日本人は真ん中、はっきりしすぎることはあんまり好きではありません。人生は黒でもなく白でもない。だいたい灰色だと思います。それを受け入れることで自然の豊かさや生物の多様性を理解できる。それが21世紀にも必要だと思います。でも、これを英語で説明するとあいまいさは否定的に聞こえてしまいます。日本人が大事にしている文化の良さは、日本にいないと十分にわからない。そこが歯がゆいことです。英語やフランス語で私も説明はしますが、説明するより、まず日本に來い、とっています。まず日本に來て半年も暮らせばわかる。実際に日本に來て日本が嫌いになった人はほとんどいません。ちょっと前ですが、中国で日本を勉強している学生が修士論文を書く前に日本で数カ月を過ごすということで20人ほど來ました。日本語はとてもうまいのですが、日本に來たことがない人ばかりです。彼らに印象を聞きました。北京と比べてどう？と。日本人はとても優しい、と言いました。銀座で歩いていてぶつかりそうになると、「ごめんなさい」と言ってよけてくれる、北京では「そこどけ」とつつこんできます。日本人は軍国主義と聞いていたが、人は優しく町はきれいで、電車はぴったりくる。

すべてがよく組織されていて、技術もすごい、と感銘を受け、びっくりして帰るようです。来る前には日本の経済は終わりで中国の方が上だと言う気持ちで来るようですが、もっともっと日本に学ぶべきことが多いと思って帰るようです。しかし言葉だけで説明するのは本当に難しい。

日本人はそもそも言葉で説明することは得意ではありません。心と心で会話することが得意です。日本の文化芸術が人気あるのは、言葉を使わないで美意識を体や絵で表現するからだともいます。そのような機会を増やしたり、若いアーティストを日本に住まわせると、日本の良さが分かってもらえると思います。対話も必要ですが、それを裏付けるものとして体験してもらう事が必要だと思います。

司会／最後にもうお一方、何かありましたら。

会場／今日は大変興味深い話をありがとうございました。日本の文化が曖昧で白黒はっきりさせないということが特徴の一つとしてあるということでした。その中で行政の役割をどういう形で発揮できるのか疑問をもちました。文化庁の目玉政策があれば教えてほしいのですが。

K／政府がどのような文化政策をとるべきかということについてですが、文化の中身には一切介入すべきでないと思います。他方、文化が自由に花咲けるような環境づくり、国際的な文化

交流や若い芸術家の生活を支えるとか、美術館、ホールなどよいものには支援をして、才能が十分に花咲くような畑を作る、そういうことに徹するべきだと思います。

それぞれ文化庁、私も含め、いろいろな考えがあります。管総理にも彼なりの考えがあるでしょう。首相はくるくるかわりますが、中身にはタッチしないほうがいいです。ひとりひとりが持っている才能が充分花咲くように、それを妨げるものはとりのぞく、さらに促進する手段があれば、財政的な手段も取り、教育環境を整える。学校のカリキュラムも算数や国語だけでなく、芸術鑑賞など実際に芸術を体験するというようなことをなるべくやったほうがいいです。まだ予算は充分ではないですが、芸術家、演劇家で夏休みに子どもにいいものを見せたいという活動を支援しています。そういう方が稽古の時間を犠牲にして、地方の小学校、中学校に行って本物の音楽を聞かせ、演劇を見せます。

都下の東久留米の小学校での様子を見に行ったことがあります。劇団が「走れメロス」をやっているのを指導していました。子どもたちは生き生きとやっていました。プロだから一流の芸術を子どもたちに見せることができる。特に小学校から中学校まで、心が真っ白で開かれているその人たちに見せることで一人一人が芸術文化を理解する力を得、能力・習慣がついてくる。

限られた予算の中で、どの分野がいいか、どの芸術家を呼ぶかということを役人が判断するとしばしば間違えます。専門家が判断して、小学生に本物を見せる。そういう事を柱にしてやっていく。今日やって明日すぐ成果が出るとは思いませんが、10年後、20年後、子どもたちが大人になった時に、芸術家にならなくても、心の豊かさ、精神性の重要さが分かっていたら、総理大臣になろうと、経団連会長になろうと日本はずっと良くなると思います。今の人が良くないと言っているわけではありませんが。

司会／まだまだご質問はあるかと思いますが、時間の都合で、質疑は終わらせて頂きたいと思います。

近藤長官、今日はどうもありがとうございました。

開館百周年記念式典 & 記念講演

(別冊 かまくら図書館だより)

鎌倉市図書館 発行

平成 24 年 1 月 4 日

